探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：呉市立天応学園

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
呉市立天応学園　前期課程	８	192人
呉市立天応学園　後期課程	５	80人

(R5. 12. 1現在で記入)

１　指導上の課題

（１）生活科・総合的な学習の時間についての課題

・児童生徒の「表現」に関するアンケート項目の肯定的な回答の割合が十分ではない。「わかりやすい発表」に関する指導や、理由や根拠をもって発表させる指導が未だ不十分である。
・各学年における探究的な学習の進め方に課題がある。児童生徒の「問い」を生かして考えさせる指導が未だ不十分であり、教師のカリキュラム・マネジメント力やファシリテート力の不足が要因として挙げられる。
・ルーブリックの活用について、目指す姿の児童生徒との共有が未だ不十分である。またルーブリックを提示したことによって児童生徒の学習意欲が鈍化した現状があるため、ルーブリックの提示の仕方を工夫する必要がある。

（２）児童生徒についての課題

・自分の考えとその理由を明らかにして、相手にわかりやすく伝わるように工夫することが十分ではない。
（前期課程92.６％、後期課程83.２％）
・考えたり提案したりしたことに実際に取り組むことが十分ではない。
（前期課程94.４％、後期課程86.４％）

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

①　研究テーマ

自他の知をつなげ、粘り強く学ぶ児童生徒の育成
～対話・探究・貢献を軸とした授業づくりを通して～

②　研究のねらい

プロジェクト型学習の視点から、教科等を横断しながら、「実生活・実社会の課題を解決（社会へ還元）する学習」「『将来こうなるためにはどうしたらいいだろう？』と考え、探究する学習」を行えるよう、これまでの実践の充実または新規の単元開発を進める。そして、こうした取組を通して、対話を通じて自他の知をつなげ、自ら設定した課題について粘り強く探究する児童生徒を育成する。

（２）資質・能力の設定について

育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「自主性、主体性」と設定し、その中でも「思考力・判断力・表現力」に焦点を当て、具体の姿を次のように想定した。

○思考力・判断力・表現力

後期	（実社会・実生活の中から）問いを見いだし、効率的・効果的に分析して、根拠を明らかにしながら、論理的に表現することができる。
中期	（実社会・実生活の中から）問いを見いだし、効率的・効果的に分析して、根拠を明らかにしながら、順序立てて表現することができる。
前期	身のまわりから問題を見つけ、集めた情報から考え、理由を明らかにしながら、相手に伝えることができる。

（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

○探究的な学習に向けた課題と方策の整理

・探究的な学習を進める上で課題になる事柄に対して９つの方策を立て、生活科及び総合的な学習の時間を中心に、その方策を具体化する取組を実施した。これにより、授業づくりの視点を明確にすることができ、前期課程・後期課程それぞれの強みを生かしながら実践を進めることができた。また、この方策を基に、防災や生き方等に関するアンケート結果の分析から「問い」を見いださせたり、目的に応じた他者との協働の場を仕組んだりしながら、社会に還元する「提案型のゴール」を児童生徒とともに設定した。

探究的な学習に向けた課題と方策の整理

課題	方策
探究課題が児童生徒自身のものとなっていない。	❶探究課題に対し開いた問いづくり。発達段階に応じた分類。
	❷探究課題に係る基礎データの整理。データから生み出す「問い」。
目的が不明確。情報収集が形式化。	❸実現したい姿を明確にし、その実現に必要な資源を検討しながらプロジェクトの立ち上げ。「問い」を追究するために、必要かつ適切な情報収集を選択・実行。
学んでほしいことを児童生徒に順に与えている。	❹体験で終わる取組の廃止。
	❺「問い」の事前検討時に、児童生徒の発想を想定した対応策の準備。
「まとめ・表現」の取組の停滞	❻積極的な失敗体験。
	❼目的に応じた他者（専門家、行政、地域住民等）と協働する場。
探究のサイクルが繰り返されない。	❽提案型のゴール設定。
	❾「問い」の階層の整理。

○外部人材や学校運営協議会等を活用した授業展開

・国立呉工業高等専門学校の教授と学生を招いた防災学習会の開催
・学校運営協議会や地域ボランティア団体と連携した学習
・地域の自治組織と連携したゴール設定

○学びのフレーミング（枠づくり）

・昨年度作成した１枚ポートフォリオの活用
・ＩＣＴを活用した振り返りの蓄積
・呉版単元構想シートを活用した単元設計

○新校舎の活用

・新校舎に込められた思いを継承する学習
・防災宿泊体験の実施
・地域防災訓練および有事の際の施設活用体験の実施

【小中連携の取組】

①　児童生徒の関わり

○総合的な学習の時間における児童生徒の交流の場の設定

・前期生の防災に関するプレゼンテーションづくりに後期生が助言（５年、８年）
・９年生が自作した防災すごろくの体験会を企画（５年、９年）
・校内防災イベントを企画（４年によるスタンプラリー、全児童生徒が参加対象）

②　教職員の関わり

○総合的な学習の時間に係る指導体制の工夫

・５～９年生におけるＴ・Ｔ指導（学級担任と研究推進リーダー、後期課程はさらに学年所属の教員も含む）

○研究推進に係る校内研修の開催（全８回）

・「探究的な学習」に係る理論研修
・校内授業研究会の開催とそれに係る学習指導案の検討
・ルーブリックに基づく研究協議
・教育課程編成に向けた教科担当間の連携

【資質・能力の評価】

○年度当初に、育成を目指す資質・能力を再確認。研究推進計画にも位置付けた。
○前期と後期それぞれ１本ずつ、単元ルーブリックを活用した生活科及び総合的な学習の時間の研究授業を実施した。研究協議では、児童生徒の具体の姿を取り上げ、単元ルーブリックに基づく協議を行った。
○授業ごと、学期ごと、単元ごとにまとめた振り返りの記述を評価に活用した。振り返りの視点を、その単元の評価規準に沿った内容とし、ＩＣＴを活用した振り返りの蓄積を行った。また、児童生徒が作成したプレゼンテーションや掲示物及びその作成過程を記録することで、評価に活用することができた。

３　実践事例

○失敗を繰り返しても試行錯誤しながら完成させた「わくわくおもちゃランド」（方策❻）

１年生・生活科では、地域で採れる自然物を活用し、近隣の年長児と一緒に遊ぶ体験（おもちゃランド）をすることを通じて、地域や自然のよさに気付く場を設定した。ゲストティーチャーによる指導を通じて、身近な自然を活用して様々な遊びを体験した。児童はおもちゃランドに向けて自然物を活用したおもちゃを自作したが、相手が遊びやすいおもちゃに仕上がっていないことに気付き、何度も試行錯誤を重ね、相手が楽しめるおもちゃを粘り強く仕上げていった。さらに、おもちゃ本体だけでなく、遊び方のルールや説明の仕方などにも注目し、それらが相まって「楽しい遊びになる」ことに気付いていた。

○社会に還元する「提案型のゴール」（方策❽）

７年生は、「未来創造プロジェクト～生き方座談会を開こう～」と題し、自分たちが大切にしたい生き方や指針を地域の人と語り合う場を設定した。単元の前半では「自分史」を作成することを通じて自分の生き方に対する考えを深めた。生き方座談会本番では、生徒の考えを地域の方に発表するとともに、参加者の方の生き方も話して頂き、より良い生き方を改めて考える場を作ることができた。

○外部人材を活用した防災学習（方策❼）

７～９年生は、国立呉工業高等専門学校の教授及び学生の方々と協働して防災学習に取り組んだ。現地踏査を基にした手作りハザードマップや、被災体験を基にした防災動画や防災すごろくを作成した。さらに、「第２回天応マチづくり討論会～今解きトーク」を開催し、地域の自治会長や学校関係者に広く発信することができた。「マチづくり」には、わが町に合う（マッチする）まちづくりをしたいという思いが込められている。

４　研究の成果と課題等

（１）成果

①　学習アンケートの結果

校内学習アンケートにおける肯定的な回答（５～９年生対象）

項目	課題意識	整理・分析	表現
４月	97.0％	91.7％	89.2％
１月	96.2％	95.0％	93.3％
差	－０.８％	＋３.３％	＋４.１％

昨年度末は、表現について肯定的な回答の割合が減少していた。発表内容に求めるレベルが上がってきていることにより、「まだまだ高いレベルを目指せる」と向上心が生まれてきている結果であると考察したため、本年度はより発展性のある内容に取り組ませてきた。そうした取組が、児童生徒の学習意欲を高め、充実感をもたせることができたものと考えられる。

② 児童生徒の変容

「思考力・判断力・表現力」が高まったと判断できる発言や記述が増えた児童生徒の割合（令和６年１月、単元開発学年）

１年生	７年生
85.2％（34人中29人）	83.3％（24人中20人）

○課題解決に向けて他者のアドバイスを生かし、失敗を経験しながらも粘り強く取り組めるようになってきている。（１年生）

児童Ａの記述：（「ともだちにおしえてもらったこと」として）もうちょっとけんだまのかずをふやしたらいいよ。つぎのじかんは、ちょっとけんだまのかずをふやします。
児童Ａの様子：自分が試作したおもちゃについて、友達から「もっとひもを長くしたらいいよ」とアドバイスをもらい、それに基づいていくつも試作品を作り、友達に遊んでもらって感想をもらうなど意欲的に活動する様子が見られた。

○自己と向き合ったり、多様な考えに触れたりすることで、自分なりの考えを導き出せるようになっている。（７年生）

生徒Ｂの記述：（生き方座談会を終えた後の振り返りより）単元の学習前の自分は将来のことなんかどうにかなるでしょ、まだ早いと思っていました。しかし、この学習を進めていくことにより、将来のことをよりよく知り、今の内からできることはないかとも考えるようになりました。　～中略～　前までは、自分の好きなことをすればいいと思っていました。でも、将来の夢、目標を決めることにより、その目標を達成するために必要なこと、日頃からしていくことなどを考えるようになりました。「将来なんかどうでもいい→将来の夢に向かって生きる」、こんなにも考えが変わったのは、自分史づくり～座談会までの学習があったからこそだと思います。これからは、夢や目標に向かって今からでもちょっとずつ努力していきたいです。しっかりと目標を達成できるために必要なことを考え、努力を続けていけるような人になりたいです。

（２）課題と今後の改善策

課題	今後の改善策
探究的な学習に関する持続可能な指導体制が未確立	・Ｔ、Ｔ体制の見直し ・探究的な学習に関する継続的な理論研修の実施
活用可能な外部人材が未集約	・人材の氏名や活用事例等をまとめた一覧表の作成